日政策に対応する日本の国内の歴史的条件との全体的な把握も未解決の問題として残されている。しかし以上の結論は、われわれ後進が正しく継承し発展せしむべき学問的遺産である。

この結論に対して三以下一一に至る九篇の論文は、いわばその前提となるべき各論である。著者がフランス・イギリスなどで蒐集された史料及び国内史料が縦横に駆使されて、誠実な論理に基づく考証が展開されている。即ち三「外国公使の江戸退去問題」はヒュースケン暗殺事件を中心として、武士の排外運動はその根が浅く貿易は順調に発展していたことを論証し、四「生麦事件の一考察」は英国公使及び政府の協調的な対日外交方針を考証し、五「下関砲撃に対する英仏米蘭四国公使の聯盟」六「下関事件に対する英仏両国の態度」七「英仏米蘭四国公使の兵庫沖進出の事情」は、それぞれの事件について英仏などの史料を援引しながら、その本質を究明し、八「仏国公使レオン・ロッシュの政策及び行動」九「徳川昭武の渡欧と日仏英三国の関係」一〇「メルメ・デ・カション」一一「幕府の仏国軍事教官の招聘」も、同じく内外の史料によつてフランスの対日政策、及びそれに対応する幕府の絶対主義化の努力、例えば横順賀製鉄所の建設や軍制改革などの問題を詳細に説いている。

最後の一二「アイヌ墳墓発掘事件」は慶応元年函館の英国領事館関係者がアイヌ人骨を盗掘して本国に送つた事件を述べたもので、領事館員が日本に示した植民地に対する如き行動、英本国及び公使の妥協的態度、アイヌ部落の憤激、それに支えられた幕府の強硬な抗議、これらの対抗関係が描かれて、当時の日本の国際的環境の問題についても極めて暗示的である。

以上それぞれの機会に発表された十二篇の論著を通読してみると、当然のことながらかなり叙述の重複が目立つ。しかし取扱われている問題は、いずれも幕末の外交に関する重要なテーマであり、発表当時そのテーマについて最高水準を示した労作である。もし読者が幕末の国際的契機の統合された歴史的条件についての解答を本書に求めるならば、或は失望するかも知れない。また貿易開始に対応する国内産業の変質を研究し維新変革の運動を理論づけようとする続者も、同じく失望するかも知れない。けれどもそれは続者みずからに負わされた課題である。本書はこれらの課題への出発点である。それにしても、著者が昭和二—四年の欧米留学中に蒐集された史料が、主として本書の根幹となつているのであるが、著者が晩年これらの史料を整理して、一層体系的な外交史の大著をほぼ脱稿されていたにも拘らず、昭和二十年五月の戦災でこれら総てを焼失されたことは、学界の為にも誠に残念である。だから本書は著書の残された業績にとつては、いわば氷山の一角である。（宝文館刊、三九六頁八〇〇円）

—時野谷　勝—

藤田五郎著
封建社会の展開過程
—日本における豪農の史的構造—

私たちが、藤田五郎という名前を知つたのは、戦後まもなく発表された「日本近代産業の生成」（日本評論社）というりつぱな書物であつた。もちろんそれ以前にも「歴史学研

究」などにのつた論文があつたが、氏はこの著書ではなやかに学界に登場した。この「生成」は、江戸時代の農村の豊富な例証と分析とに加えるに、その問題点の構成が比較的平易にまとめられてあつたため、多くの研究者の発言を容易にし、幕末維新の発展段階をめぐる論争の新しい焦点となつた。

それ以来、氏は日本的な近代化のシンボルである豪農マニュファクチュアの解明のために、諸雑誌に労作を発表するとともに、「近世農政史論」（お茶の水書房）「近世封建社会の構造」（同上）とつぎつぎ好著を世に送り出した。その中で、氏の分析はますます精緻となり、豪農マニュという氏独自の見解はいよいよ強固なものになつていつた。未熟な私たちは、氏の正確を期せんがためめ渋な文章と執拗なくらい旺盛な探求心に、なかばはげまされ、なかば悩まされながら、これらの論著の公表を待ちもうけた。なかんずく、会津の幕内村佐瀬家を中心にして展開される氏の思索の強靱さには、大いに教えられかつ勇気をあたえられたといわねばならない。それはつまり、日本のどの地点をとりあげても、日本社会の構造と民衆の歴史を組み立てることができるという、また、それを豊富かつ精緻に追求しうるという可能性への確信といえるであろうか。

いまこの藤田氏の忽然たる逝去にあい、その遺著「封建社会の展開過程」（有斐閣）を読んで、氏が必死の決意となみなみならぬ努力をしてこられたことに、あらためて心からの深い尊敬の念をはらわずにはいられない。氏の才能と努力が、この「過程」にあますところなく結集されているからである。いや、後述するように、氏はここでは才能と努力をこえた分析を展開しているとさえみえる。氏の逝去を惜しまずにはいられない。そして、それと同時に私は、これだけの労作を可能ならしめた氏の夫人の、背後にある功をも看逃すことができないのである。これは通り一ぺんの言葉なのではない。言葉の修辞よりも、日本の研究者とその家庭がおかれている現状の問題に関連するからである。私はそれにふれる資格がないが、このことが日本の歴史学・経済学の前進のための重要な環であることだけは指摘することができると思う。氏の逝去を痛惜するが故に、私にはこれだけの前置はぜひ必要だと思われるのである。

あたえられた少い紙面で「封建社会の展開過程」を紹介するのは、率直にいつてむつかしい。それだけ豊富に広汎に、問題が展開されている。本書の目次に眼を通しただけでも

第一章　土一揆と百姓一揆——政治過程
第二章　撰銭禁制と貨幣改悪——流通過程
第三章　質物奉公と年季奉公——生産過程

となつていて、課題が多方面にわたつていること、それらが統一的に把握されようとしていることがわかる。藤田氏といえば、幕内村という印象は、ここで完全に裏切られるであろう。また同時に、氏が幕内村であれだけの労作を積み重ねた理由が、ここにはじめて理解もできるのである。この著述が、氏自身も大いに自負されるものであつたことは、その「はしがき」によつてもうかがえるし、非力な私が読み返しても、真に氏の遺著たるにふさわしいことが、おぼろげながらもわかるからである。

その「はしがき」は、この著作の統一的な視角を要約している。いうまでもなくそれ

は、近代日本の起点となつた「明治維新」とはいつたい何かという問題である。この解明のため、氏は次の四点を主張している。すなわち、㈠国際的契機は重要だがやはり、日本社会の内部構造がはつきり把握されねばならない。㈡この内部構造が「豪農マニュファクチュア段階」であるといつた段階規定論的解答は否定する。㈢しかし、豪農の歴史的位置・構造及びその役割は、さらに重視しなければならない。㈣その上で、段階論を考えねばならぬが、そのためには、別個の新しい方法が必要である、というのである。これだけみれば、きわめてアカデミックな問題提起で、直接私の前置に結びつくものではない。

しかし、氏がなぜ段階論的解答を否定したのか、また氏のいう「別個の新しい方法」がいかに展開されるか。これらが、本論二章にわたる農民一揆・貨幣政策・労働力の存在形態の分析なのである。それらの個々にわたつて、詳細な検討が行われることが望ましいが、それは私の能力以上のことに属している。ただ本書の特色として、私は次の三点を指摘しておくにとどめたい。全体としてながめた場合、㈠一五、六世紀の土一揆と一七、八世紀の百姓一揆の比較といつた、政治過程からその分析がはじめられていること。㈡そうした政治過程が特色づけられる貨幣経済のあり方——土一揆と撰銭禁制・百姓一揆と貨幣改悪といつた相互関連と比較において、流通過程が分析されていること。㈢この流通過程に関与する農民の歴史的存在形態が、質物奉公と年季奉公の問題でとらえられていること、である。といえば、たんに章を追つたにすぎぬことになるが、くりかえせば、政治過程から分析され、大胆な比較と関連が追求され、最後に直接生産者に焦点がしぼられてきていることであろう。さらにもう一点つけ加えるなら、きわめて精力的にアカデミックな学問遺産がうけつがれていることも、藤田氏ならではの本書の特色とされよう。とくに、貨幣政策をとりあつかつた第二章など、小葉田淳教授の「日本貨幣流通史」その他の貨幣史の労作が豊富に駆使されていて、最も興味をよぶ個所である。

だが、氏はそうした数々の特色をあげるだけでは、満足できないであろう。氏が当面意識していたのは、幕末維新の生産力をになつた「豪農」である。本書の副題もそのことをうたつている。それにもかかわらず、私の読後感に、なぜか「豪農」の印象の薄かつたのは、いかがしたものであろうか。問題が複雑に構成されていたからか。全章の統一的叙述があたえられていなかつたからであろうか。いや決してそうではなさそうである。

氏の意図した中間地帯の豪農の「生産力的性格」を追求すればするほど、より高度な政治史の素材を分析することになり、従つて問題は多岐にわたらざるをえなくなつた。しかも、これを統一的にとらえようとすれば、豪農を構造論的な抽象的範疇としてではなく、働く農民の成長発展のネガティフな面として、具体的にとらえざるをえなくなつたからである。事実はかく、氏が意識した豪農の課題をこえて、氏の業績はおしすすめられている。この点こそ、氏に反映したぎりぎりの現実の要請なのではなかつただろうか。

だから、私はこの遺著を次のように読みとらずにはおれなかつた。すなわち、政治史の一定時期＝封建社会において、諸階級のいず

れの間に、現実の対抗関係が具体化されるかという民衆の斗争組織の問題は、まさしく流通過程のあり方によつて制約される。だがこの流通過程のあり方というのは、結局民衆のそれへの参加の仕方、すなわち民衆の生長の程度によつて規定されている。幕末維新の中間地帯の豪農はいわばその歴史的な環をなしているわけである。ただしこれは分析の順序に従つてであつて、表題どおり「展開過程」となるためには、問題を逆に追わねばならぬであろう。

あるいはこれは、歴史家の希望的な読み方であつたかもしれない。いや希望的なのではなく、氏が私たちに遺していつた課題なのであろうと思う。だから歴史家が「展開過程」を完成するためには、どうしても、幕末維新を完成するためには、どうしても、幕末維新の畿内や辺境地帯の分析を、おこたつてはならないのである。

すでに予定の紙面もこえたので、非礼を詫び氏の冥福を祈つて、つたない紹介をおわろう。

—高尾一彦—

Oscar Halecki : The Limits and Divisions of European History.

(London, Sheed & Ward, 1950)

時代区分の仕方にはいろいろあるが、古代・中世・近代（あるいは近世）と分ける、いわゆる三時代区分法は、今日でもひろく、ほとんど無批判に用いられている最も通俗的便宜的な歴史の区分法である。ある場合には、時代区分をこえた何か動かすことのできない客観的な存在であるかのように、古代的とか、中世的とかのレッテルがはられて、歴史事実が簡単に片づけられてしまう。しかしこのような不動の枠の中に歴史をはめこむことが、果して歴史を、歴史的事実を真に捉らえる道であろうか。

このような歴史の三分法がルネサンス時代のヨーロッパに発生し、十七世紀末から一般に広く用いられるようになつたこと、またこの区分法に対する反省や批判が今日試みられつつあることは、知る人もすくなくないが、この問題を真剣に考えている歴史家は、わが国では余り多くないようである。しかし、三時代区分法に対する反省は、たんに歴史哲学の問題に止まるものではないのであつて、すぐれて歴史家の問題である。というのは、ヨーロッパの歴史を研究している歴史家でありながら、ヨーロッパ史の全体構造については、ほとんど反省することなく、無批判に三区分法的構成に立脚して、いたずらに、些細な事実にのみしがみついて、巨視的態度で考察しない結果、ヨーロッパ史を研究しながら、ヨーロッパとは何であるかが分つていない、いなそれを考えもしない歴史家が多い。事実の精緻な研究が、ヨーロッパ史全体の流れの中に位置づけられないとき、歴史研究としては意義をもたないことは、すでにランケの指摘したことである。

三時代区分法の問題は、実にこのヨーロッパ史全体に、さらに広く世界史の構成にもかかわる問題であり、ひいては国史や東洋史などにも関連する重要な問題である。ハレッキのこの書は、その意味で、多少の偏向はあるにせよ、わが国の歴史家たちに極めて興味ある問題を提供していると思われる。

著者ハレッキはポーランド人で、クラカウ